

TR-I-80

否定文の理解に関する研究

A Study on the Understanding of Negative
Sentences

服部 匡

Tadasu Hattori

1989.3

概要

日本語における否定文の性質を意味論的、語用論的観点から考察する。副詞類の統語的、意味的分類及び、数量詞類等の分類を踏まえ、否定の作用域 (scope) を決定する要因について分析する。また、「-ない」、「-のではない」等の否定形式のそれぞれ持つ、談話上の機能を明らかにする。これらによって得られた知見の対話文翻訳への応用について考察を行う。

©ATR Interpreting Telephony Research Laboratories

©ATR 自動翻訳電話研究所

目次

0 .	目的と範囲	2
1	否定文の特殊性について	3
1 . 1 .	否定と発話行為	3
1 . 2 .	否定文の情報上の特殊性	4
1 . 3	否定の焦点、作用域	6
2	「ない」、「のではない」、「わけではない」等の特性について	6
2 . 1 .	「ない」について	6
2 . 2 .	「のではない」、「わけではない」について	7
3	否定の作用域について	10
3 . 1 .	焦点可能性に関する要素の分類	10
3 . 2 .	「対照のハ」と否定	14
3 . 3 .	限量的要素の生み出す曖昧性について	16
3 . 3 . 1 .	限量的表現の分類	17
3 . 3 . 2 .	有標的環境において	19
4 .	対話文翻訳への応用について	21
注		24

0 目的と範囲

本稿では主として日本語の否定文を考察対象とし、その性質を意味論的、語用論的観点から分析すると共に、特に否定の作用域の問題について分析を示し翻訳への応用の可能性を示すことを目的とする。ここでいう否定文は、単に「ない」によるものの他「のではない」、「わけではない」、「どこではない」等のような複雑な形式を用いたものを含むものとする。「不--」、「非--」、「無--」のような語彙的な否定的形式によるもの(例:「そんなことは不可能だ」)は除外する。

なお、次のような表現は、形式上は否定を含んでいるが一種の慣用表現と考え一応考察対象外とする。

- (1a) ほら、言ったとうりじゃありませんか。¹⁾
- (1b) そんなことでは困るじゃないか。
- (2a) どうもこの様子だと雨が降るんじゃないかな。
- (2b) おい。この音はエンジンの故障じゃないか？
- (3) キョロキョロするんじゃありません。(禁止)
- (4) 明日、映画見に行かない？(勧誘)
- (5) 申し訳ありませんが用紙をお送り頂けないでしょうか。(依頼)
- (6) 行かなくてはいけない。 / 行ってはいけない。²⁾(義務 / 禁止)

客員としての研究の機会を与えて下さったATR自動翻訳電話研究所榎松社長、言語処理研究室相沢室長、常に暖かい助言を頂いた吉本啓主任研究員(現NTT)、および言語処理研究室内の各位にお礼申し上げます。

1 否定文の特殊性について

1.1 否定と発話行為

本節では、否定文の持つ意味論上、語用論上の特殊性について考察する。まず、言語形式としての「否定(negation)」、あるいは、論理上の否定ということと、発話行為としての「打ち消し(denial)」ということとは、区別して考える必要があると思われる。(「打ち消し」とは、仮に、既に先行文脈に現れた発話、状況等から聴き手が念頭に持っていると考えられる事柄等を誤りであるとして打ち消す行為であると考えておく。)

言語形式としての否定文が必ず打ち消しの為に使用されるわけではないし、逆に打ち消しが必ず否定文によって行われるわけでもない。(この点はHorn(1989;74-)が指摘している。)

例えば次のような否定文は単に否定的な事態を事実として述べているだけであって、何かを積極的に打ち消すような行為を伴っていない(場合にも用いる)。

- (1) 最近あまりオオコウモリを見かけない。
- (2) もっと大きな声で話して下さい。よく聴こえません。
- (3) 私は今日朝ごはんを食べていません。

ただし、次の例に見るように、「--のではない」等を用いた否定文は「打ち消し」の性格を色濃く持っている。¹⁾

- (4) (謝っている人に)君が悪いんじゃない。
- (5) A: おまえが盗んだんだろう。

B: 盗んだのではない。借りただけだ。

この点については2.2で考察する。

1.2 否定命題の情報上の特殊性

否定文は肯定文に比べてその使用に対する条件が厳しいということを、Givon(1979)が述べている。つまり、例えば

- (6) My wife is pregnant.

のような文は道で出会った友人に脈絡なく発話しても別におかしくないが、

- (7) My wife is not pregnant.

のような文は何らの先行文脈(言語的・非言語的)なしに発話すると変である。つまり、'my wife's pregnancy'が既に話題にのぼっていたり、その可能性が考慮にのぼっているような場合でないに変だというわけである。成程、

- (8) うちの猫は昨日死ななかつた。
- (9) 私は昨日天皇陛下に会わなかつた。

のような文は有効な情報として発話されることが非常に稀である。猫が死ぬ可能性や天皇陛下に会う可能性が考慮にのぼっていたり、話題になっていたりとする場合でないといふ情報としての価値が乏しい。また、「津は三重県の県庁所在地である」といふ文は普通「津は三重県の県庁所在地ではない」といふ文より多くの情報を含んでいるように、一般に否定文は対応する肯定文よりも情報量が少ないといふるかも知れない。

しかしながら、よく考えてみると情報としての価値が低い文というのは別に否定文には限らない。例えば、Horn(1989)の引用によるGrice(1969)の以下の例文は形式上肯定文であるが、それが情報として価値を持つような文脈はきわめて限られている。

(10) I went to the meeting of my own free will.

(11) I remember my own name.

(12) The dean is breathing.

(13) The 1988 presidential election will be held.

次のような文でも同じであろう。

(14) 今週の月曜日は平日だ。

(15) この会社には社長がいる。

つまり、命題としての情報の価値の低さといふことは否定文を特徴付ける決め手にはならない。しかし、Horn(1989)が指摘するように、偶数か奇数かを問題にしている時

(16) The number five is not even.

といふ文と、

(17) The number five is odd.

といふ文は情報としての価値はまったく同じなのだが、(16)の方は例えば「君は(あるいは第三者が)5は偶数だと信じているらしいが」とか「偶数であるといふことが今問題になっているのだが」といふような想定がある場合に典型的に使用される。逆にそのような想定が会話的含意

(conversational implicature)として現れる場合もある。このように、not p といふ否定文は、p といふことに対して何等かの意味での想定

(supposition)が存在している場合に最も典型的に用いられ、逆にそのような想定が存在するとの含意を生じることがある点に最大の特徴があると
言つて良い。(ここでいふ想定には例えば一般に普通のことであるといふ
ような極めて漠然とした背景的知識による場合も含めて考えておく。)

1・3 否定の焦点、作用域

次の各文を最も普通に発話した時、下線部は否定の焦点と呼ばれる。

(18) 彼は一生懸命働かなかった。

(働き方が一生懸命でなかった、の意)

(19) 車を所定の位置にとめなかった。(所定以外の場所にとめた、の意)

(20) 太郎が来たのではない。次郎が来たのだ。

下線の部分は、ある意味で、最も直接的に否定の作用を受けていると
いって良いであろう。それぞれ、「一生懸命ではなかったがある程度は働
いたかも知れない」、「所定の位置にとめず他の位置にとめた」、「太郎
ではなく他の者が来た」といったような含意を生ずる。つまり、否定文P
においてpが焦点である場合²⁾、一般にP' [p / q]を成り立たせるよ
うなqの存在がありうるという会話的含意(conversational implicature)
が生じる³⁾。(P'はPから否定を取り去った肯定文としX [a / b]は
X内のaをbで置き換えた文を示す。)この含意は、焦点が対照の「ハ」
を伴う場合や、(ノ)デハナイによる否定文で特に明瞭である。言うま
でもなく否定の焦点とは個々の発話に依存した概念である。(なお、後
述するように、「Xノデハナイ」の場合はXの一部か全部が必ず否定の
焦点になるという特性を持つ。)

否定の焦点の特別な場合として、いわゆる対照のハの対照範囲内の要素が
否定の作用を受ける場合がある。これについては3.2で論じる。

(21) 全員は揃わなかった。(一部は揃ったかも知れない)

(22) 完全にはできなかった。(不完全にはできたかも知れない。)

(23) まじめにはやらなかった。(いい加減にはやったかも知れない。)

次に否定の焦点と否定の作用域(スコープ)の関係について考える。
「否定の作用域」という概念はもともと記号論理学における作用域の概念
に由来するものであるが自然言語に対しては明確な定義のないままに用い
られていることが多い。このため研究者によって異なる事柄を意図してい
たり議論が混乱している場合が見られる⁴⁾が、本稿では、比較的明確と思
われる佐川(1976)の次の定義に基づくことにする(原文は「否定の範囲
(portée)」)。

否定の作用域

否定の作用域とは、否定の焦点の起こりうる領域の総和のことである。

なお、否定の作用を受けるということを、否定の作用域内にあるとい
うことと同じ意味で用いることにする。

2 「ない」、「のではない」、「わけではない」等の特性について

ここで、「ない」、「のではない」、「わけではない」等のそれぞれ持つ語用論的特性について考察する。

2.1 「ない」について

久野(1982)によると「1920年に」を焦点とする次の三つの文には許用度の相違がある(1章の注3を参照)。

(24a) ??私は1920年に生まれなかった。

(24b) 私は1920年には生まれていない。

(24c) 私は1920年に生まれたのではない。

一方「車で」を焦点とする次の文は許容される。

(27) 僕は、今日車で来なかった。

久野はこの事実を、(24a)と(24b)の持つ情報構造の違いという観点から説明している。久野によると例えば(27)に対応する肯定文「僕は今日車で来た」(下線部が焦点)は、(30)のような「マルチプル・チョイス式」情報構造を持つのにに対し、(24a)に対応する肯定文は(31)のような「マルチプル・チョイス式」情報構造を持つと考えることは困難で、(32)のような「穴埋め式」情報構造を持つと考えられる。

(30) 僕は、今日、◎車で 来た

☐ バスで

☐ 車で

☐ 歩いて

(31) 僕は ◎1920年 に生まれた。

☐ 1930年

☐ 終戦の年

☐ 1940年

(32) 僕は 1920年に 生まれた。

久野の「マルチプル・チョイス式」なる概念は明示的には定義されていない。実際、久野自身、「どういうインフォーメーション構造が「マルチプル・チョイス式」構造を持っているかは明かでない」(1982:130)としているのであるが、「マルチプル・チョイス式」の条件、性質について少なくとも次の三点を述べている。

1. 一般的に言って、一回限りの出来事に関するインフォーメーションは、「穴埋め式」であり、反復して行われる出来事に関するインフォーメーションは、「マルチプル・チョイス式」である(130)。2. 焦点に現れ得る要素の数が限定されていない場合(例えば生年月日)は、「穴埋め式」であり、それが極めて限定されている場合(例えば通勤の乗り物)は、「マルチプル・チョイス式」であり得ると言える。(同)

3. マルチプル・チョイスのセットの中にunmarked member がある時は、そのunmarked member を代表として使わなければならない。(否定の焦点となるための条件)

上の三つを検討するに、まず、久野自身が認めるように、一回限りの事象を表すにも拘らず(久野によると)マルチプル・チョイス式であるため適格である次のような例があるから1には例外がある。

(33) 今度、偶数年に生まれた人は徴兵になるという法律が通ったが

僕は、幸いなことに、偶数年には生まれなかったから大丈夫だ。

次に、2についていえば、選択枝の数が限られているというのは相対的な事柄である。さらに、(34)は人の生年月日を焦点とするのであるからその焦点に現れうる選択枝の数(私はX年に生まれた)のXに入りうる年号の数)は、数多くあるはずである。しかるに(24a)に比べて(34)は自然である。同様に(35)では「一万人目」に替わり得る選択枝は極めて多いはずである。この場合の選択枝は{一万人目・それ以外}であるという説明は一種の循環論と思われる。

(34) 私は、幸か不幸か昭和40年に生まれなかったので、ひのえう

まの年の人の苦勞は解らない。

(35) (ちょうど1万人目に入場すると記念品が貰えたのだが)一万

人目には入場できなかった。

これらの例から見ても、選択枝の数が限定されているか否かが問題なのではなく、「XかX以外か」(例えば「昭和40年か他の年か」)なる対立が意味を持ったものであるか否かが問題であることは明らかである。

結局、1.2.で検討した否定文の特性から、「pナイ」の使用には何らかの意味でpということの想定が存在していることが必要である。その特殊な場合として、pに含まれる要素iについて「p[i/x]を成り立たせるxはiかi以外か」に話者の関心があり、iの方が(従ってpが)無標的に捉えられる(心理学的な「地(ground)」になる)場合があり、この場合iが否定の焦点として理解されるものと考えられる。

なお、既に述べたような否定の焦点があることは、「pナイ」の使用が適格であるための必要条件ではない。特に否定の焦点がない場合もありうる¹⁾。この場合は単に「pか not pか」に話者の関心があり、「p」が心理的に「地」と感じられる場合に適格に使用される。

2.2. 「のではない」、「わけではない」について

pノデハナイは次の二つの重要な性質を持っているように思われる。

第一には、既に談話に上った発言や聴き手や第三者が信じている(可能性はある)と話者が考える事柄の打ち消しになってないといけない。²⁾

そこで例えば、(3)は何らの脈絡なしで発話してもおかしくないが、(4)は談話冒頭に発話すると変である。

(3)今日は会社に行かない。

(4)今日は会社に行くのではない。

また、打ち消しの行為を伴わない例として挙げた1章の(1)-(4)の「ない」文を「のではない」文にすると通常の文脈では変である。例えば、(5)は、相手の思い込みを訂正するような場合以外変である。

(5)もう少し大きな声で話して下さい。??よく聞こえるのではありません。

せん。(cf. よく聞こえません。)

また、そもそもpが発話したり信じたりできないようなものである場合はおかしい。例えば、「人っこ一人」、「びた一文」等はそもそも肯定文には現れない要素(否定対極要素negative polarity item)であるからpを発言したり信じたりできないため(6)はかなりおかしい。

(6)??人っ子一人いるんじゃない (cf.*人っ子一人いる。)

第二に、p以外に「正解」がある。ということが含意される。(必ずしもそれが何であるかを話者が知っている必要はない。)

そこで、「寒いですか」という単純なyes-no疑問に「寒いんじゃない」と答えるのは普通は変で、もしそう答えた場合は、「寒いのではないが、気分が良くないのだ」というように、他に「正解」があることが含意される。

このことから、ノデハナイ否定では必ず否定の焦点があるといえる。つまりpノデハナイでは、pの一部i(または全部)を他の何かと入れ換えればpが成り立つようにな(りう)るiの存在が含意される。³⁾

さらに、ナイ否定では否定の焦点になりにくい要素が容易に否定の焦点になる。久野による次の対比を観察されたい。

(7) ?私は1959年に生まれなかった / 私は1959年に生まれたのではない

次に、ワケデハナイの性質について。寺村(1985)は次のように述べている。

「Qワケデハナイ」という言いかたのでてくる仕掛けは[中略]話し手は、まずPという発言をし、それに対して、自分がPとやったことから、聞き手がP→Qという推論をする。その推論を否定する言いかたである。([中略 PとQの言われる]) 順序は逆のこともある。[中略] Pが独立した文で表わされるとは限らず、Qワケデハナイで終わる文のどこかに含まれ、その一部になっていることも多い[例文略]。また、否定の対象であるP→Qという推論が、世間一般の常識、社会通念であって、Qワケデハナイというのが、その、世間の人々が思い込みがちな常識、考えかたを否定する意図に出ていることも多い。[引用終り]

結局、「Qワケデハナイ」は、Qを導く推論を想定してその妥当性を否定するところに意味・機能の中心があるといえる。例えば次の例では文脈等から聴き手がQと推論しそうだという想定がある。

(8)やりたければやったら良いが、賛成しているわけではないぞ。

(9)何も好き好んでやっているわけではない。

(10)だてに東大を出ているわけではない。

特殊な場合として次のように発言の前置きとして予め相手の考えそうな事を打ち消す多くがある。

(11)言い訳するわけではないが、

(12)君が悪いというわけではないけど、

また、Qとして極端な事態を取り上げて打ち消す用法が多く観察される。過度の一般化に向かう推論を否定するものと解釈できよう。

(13)誰でもできるわけではない。

(14)反対が全くなかったわけではない。

(15)いくら騒いだって死人が生き返るわけではない(からよせ)。

(16)いくら眠くても遅刻をして良いわけではない。

なお、「pのではない」の場合、pが「びた一文」等の否定対極要素を含み難いと述べたが、「pわけではない」の場合はこれと異なり、「びた一文くれるわけではない」等といえる。「pのではない」では、「p」という言語表現そのものを訂正するという性質が強いのにに対して「pわけではない」はむしろ推論内容の否定という色彩が濃いためと考えられる。

「のではない」は、(17)、(18)のように、同一の事柄の不適切な表現を訂正するのに用いられるが「わけではない」には対応する用法が見いだしにくいことも同様に説明できよう。

(17)100円しかないのではない。100円もあるのだ

(18)売ってやるのではない。売らせて頂くのだ。

3. 否定の作用域について

3.1. 焦点可能性に関する要素の分類

3.1.0. 概要

本章では、ナイ否定において否定の焦点になりうる要素にどのようなものがあるかを考察し、あわせて曖昧性(ambiguity)の問題を簡単に取り上げる。

個々の文において、否定の焦点になりうる部分と焦点になりえない部分を区別することができる。例えば、次の文において、「この機械を」や「毎日」は否定の焦点になりうるが「率直にいて」が否定の焦点になることはありえない。

(1) 率直にいてこの機械を毎日使いたくない。

そして、ある要素が否定の焦点になりうるかどうかは、その要素の種類によって制約されている。本節では、述語の連用要素を、A類、B類、C類の3種類に分類する。

本節では、[- - - (動詞 / 形容詞) ナイ] の形の文では、述語の連用要素を次の三種類に分類することにする。¹⁾

A類は概ね否定の焦点になりうる要素である。但し、特殊類としてその意味的性質によって否定の作用域に入るか否かの曖昧性を生じるもの(A+-)、(ii)否定的な環境にしか起こらないもの(A-)、(iii)通常否定と共起しがたいもの(A+)の三類を含む。

B類は「ナイ」による否定では通常否定の焦点にならない要素である。

C類は「ナイ」だけでなく「ノデハナイ」等の否定形式をもってしても普通否定の焦点にはなりえない要素である。

なお、これらの三分類は、否定の焦点可能性のみを規定するものではなく、他にも疑問の焦点となる可能性や、各種の従属形式の補文に出現する可能性とも密接に関連している。また無標的な語順を規定する上でも有効な概念と思われる。

以下、各類の要素の例を列举したのち考察を行う。

A類要素

南(1974)による連用要素の統語的分類におけるA類要素の他に、主語、時・場所等の連用要素、否定と呼応する副詞類等を含めたものである。否定に関して4つに下位分類される。

A⁰類

否定の焦点になりうる要素である

(α) 主語、目的語等の必須格要素、時・場所等の要素(限量的なものを除く)²⁾

奥さんが来ないで、娘さんが来た。

この本を読まずにあの本を呼んだ。

車を所定の場所に駐車しなかった。(ので罰金をとられた。)

(β) 手段、様態、程度等の副詞的要素

ワープロで書かなかった。

自分で問題を解けない。

一生懸命やらなかった。

(γ) 文補語

「- - と思わない」等の補文の全体は、否定の焦点になりうる。補文の一部を焦点にする可能性は、その要素の性質と主文の述語の性質によって変わる。

太郎が来るとは思っていない。

A⁺⁻類

この類は論理的に否定の作用を受けるかどうかについて曖昧性を生じうるものである。三つの類に下位区分できる。(α)の類の中には否定の作用を受ける解釈を取りやすいものととりにくいものがある。この問題は3.3.1において詳しく論じる。

(α) 限量的(quantificational)性質を持つ要素

数量詞、数詞を伴う名詞句

全部(+のN、も含む。以下同じ)、多く、沢山、かなり、相当、ほとんど、少し、誰か、誰も、等)

頻度(いつも、毎日、時々)

程度(ほぼ、かなり、ほとんど、等)

その他の限量的副詞類(どこにも、等)

全部読んでいない。

こんな品はどこにも売っていない。

毎日掃除をしなかった。

(β) 次のような副詞的要素

継時(朝から晩まで、一日中³⁾)

- して(一部の用法)

同様(-のよう、)

意志(わざと、等)

理由・目的(-という理由で、-のために)

こんな物はどこにも売っていない。

朝から晩まで仕事をしない。

太郎と同じように問題が解けなかった。

切手をはって投函しなかった。

なお、これらの他に「も」、「だけ」等の副助詞を伴う要素も否定との間に作用域の曖昧性を示すことがある。

わざとそんな指示を出さない。
花子のために働かなかった

A⁺類要素

この類の要素は通常の文脈ではそもそも否定と共起しがたい。この点で他のA⁺類要素とは異なるが、特殊な文脈では否定の作用を受ける解釈を取る点でA類要素の一部と共通の性質を持っている。この問題も3.3.で述べる。

肯定対極表現（ぼちぼち、そろそろ、やっと、ついに）等
*そろそろ行かない（cf. そろそろ行く）

A⁻類要素

A⁻類は逆に主として否定的環境に現れるものである。四つに下位区分される。

（α） 否定対極副詞類

これらはいわゆる対照の「ハ」を取ることができる。⁴⁾

あまり（+X、も含む。以下同じ）、たいして、さほど、等
??あまり働いた。（cf. あまり働かなかった。）

（β） びた一文、人っ子一人、等⁵⁾

（γ） 否定強意副詞類（決して、ちっとも、誰も、何も⁶⁾等）

私は決してそんな場所に行きたくない。

（δ） 「Xしか」

（γ）、（δ）の生起する環境はほぼ否定文に限られている。⁷⁾

B類要素

B類要素は、ナイでは焦点にならないがノデハナイ、ワケデハナイでは焦点になることがある類である。

原因（-のために、-のおかげで、から*1）

確度（絶対、多分、ひょっとすると、確かに、きっと*、まったく（程度））

台風のために欠航したのではない。（cf. 台風のために欠航しなかった）。

それは確かに動かない。

きっと来るわけではない。（cf. きっと来ない。）

C類要素

C類要素はノデハナイ、ワケデハナイでも否定の焦点になりにくい類である。これらは命題に対する話者の態度や断定の根拠などを示すもので

あって、意味上命題の外の層に属するため論理的に否定の作用を受けないものである。⁸⁾

伝聞根拠 (- によると)、

強意副詞類 (まったく (態度) , 実に)

態度 (不幸なことに、残念ながら、実を言うと)

判断根拠 (- から * 2)

田久保先生によるとこの論文は正しくない。

あの時計は残念ながら君にはあげられない。

空が晴れているから、明日の運動会は中止にならない。

次に否定の焦点位置に関する傾向を考察する。次の四つの傾向があり

1 - 3 はこの順に優先するように思われる。

1 対照のハの対照の範囲となる要素は、はば、否定の焦点になる。より一般的に、文脈的に対比される要素は焦点になりやすい。(これら要素は否定の焦点になりうる要素列の中の左端にあることが多い。)

今日は花子は、前の時のようには着飾っていない。

今日は奥さんが来ずに娘さんがきた。

本人が受験しなかつたので失格になった。

このレコードを買わずにあのレコードをかった。

うまくできなくとも、慎重にやれば良い。

2 必須要素よりは任意要素の方が否定の焦点になりやすい。また、複雑な名詞句等では、主部より修飾部の方が否定の焦点になりやすい。

全員が本気でやらなかつたので失敗した。

真面目に宿題をやらなかつた。

プログラムの経験のある学生をよこしてくれなかつた。

3 より右側の要素が焦点になりやすい(旧 - 新の原則による)。ただし、逆の場合もある。(音調も密接に関係しているように思われる。)

その仕事を山田に頼まなかつたのは間違いだった。

4 Xノデハナイでは、主語あるいはXの左端要素が焦点になりやすい。

太郎が花子を殺したのではない。

3.2 「対照のハ」と否定

いわゆる対照のハは、名詞句、数量詞類、副詞類(「上手にはできない」)、述語句(「行きはしない」、「赤くはない」)等多くの要素に付くことがある。対照のハについて、3種類の下位区分が可能であるように思われる。

その第一は、「最低限」を表すものである。例えば次の例がこれにあたる。

(1) (少なくとも) 10人は来た。

(2) 英語が少しは分かります。

このような含意を発生する要素は何かの尺度での最大限の点を表すものであってはならないから、例えば次の文は不適格である。(「みんな」の場合、第三型と解釈される可能性はある。)

(3) *{全員・みんな}は来た。

(2)と(4)を比べると、後者の方が、「多くは分からない」との含意を明瞭に生ずるように思われる。

(4) 英語が少し分かります。

この型を「最低限型」と呼ぼう。

第二のものは、否定的環境において、下方への含意(downward implicature)を示すものである。例えば、

(5) まだ全部は読んでいない。

(6) 沢山は要らない。

等がこれにあたる。それぞれ、「少しならば読んだ(可能性がある)」、「多少は要る(かもしれない)」との含意を生ずる。⁹⁾

ここでいう否定的環境は否定文より広い範囲を含む。例えば、

(7) (900円ならともかく) 1000円は高すぎる。

(8) 一度に全部はちょっと難しいかもしれない。

等も含めて考えておく。一般的に言うと、ハを附せられた要素 p を含む文 P から、POSS(not P [p / q]) という含意が生ずる。ここで q は(文脈的あるいは習慣的に決定される)何等かの尺度において p よりも下方に位置する要素としPOSSは、認識的な意味での可能を表すものとする。P [p / q] は、P に含まれる p を q で置き換えたものとする。)

「少し」のように尺度の下方に位置する要素の場合は、この種の含意が生ずることはない。従って例えば、次の文は変である。(無理に解釈すると「少しは読み残した」の意味で最低限型になる。)

(9) ??少しは読まなかった。

この第二の型は「- とまでは言えない」を意味するものであるから「上限否定型」と呼ぶことにする。

第三のものは、「AについてはX」、「BについてはY」という形での二つの事柄の対比を示すものである。(前者が表層的に現れないこともある。) 例えば、

(9) 太郎は山へ行き花子は海へ行った。

(10) 太郎は来たが次郎は来なかった。

(11) (人が沢山来たが) 面白い人は来なかった。

等である。この型を「二者対比型」と呼ぶ。

これらのうち、上限否定型と二者対比型、二者対比型と最小限型は連続的なものである。また、三種のハを統一的な原理で説明することも可能であるかもしれない。さらには、対比型のハと、下記のようないわゆる主題のハ、すなわち対照性を帯びないハの間の区別も連続的なものである。

(12) 私は明日東京に行きます。

(尾上(1981)は、主題のハも含めたハ一般の統一的な説明を試みている。)しかし、「ハ」によって生じる含意の性質・種類を理解する上で上に述べたような分類は有益であるように思われる。次にこのような分類に立脚して、対照のハと否定のスコープの関係について考察する。¹⁰⁾

曖昧性を生じうる要素に対照のハが附せられているときその要素は一般に否定のスコープに入りやすい。

(13) 全部は見なかった。

(14) 太郎と同じようにはできない。

というように。これらはいずれも前節で述べた上限否定型のハである。

しかし、その対照のハが前節で述べた二者対比型や最小限型のものである場合にはこれとは異なる。例えば、

(15) 10時迄は寝なかった。

のような文は、「9時すぎまでは寝たがさすがに10時迄は寝なかった」の意と「10時迄は起きていた」の意があるが、後者の場合は否定のスコープ外に出る。この場合のハは二者対比型または最小限型である。

B(β)類副詞類の場合、「わざと」、「-のように」等はハが付いた場合否定のスコープに入りやすい。つまり、ハが上限否定型になりやすい。また、継時のもののうち、「一日中」、「朝から晩まで」のような全量的なものもハが上限否定型に解されて否定のスコープに入りやすいが、「何時から何時まで」のように特定の時間の広がりを示すものや、「何時まで」のように終点のみ示すものは二者対比型や最小限型に解せられうるため、二義性が残る。

限量表現の場合も、「全部」のような全量的なものでは、通常ハが上限否定型に解されるため否定のスコープに入るが、「多く」などは微妙であり、否定のスコープ外に出る解釈も可能であるように思われる。例えば、

(16) 会議が始まったが多くの人は入場しなかった。

は、「多くの人は[入場せずに残った]」という解釈も可能であるように思われる。この場合、「会議が始まった」とことと「多くの人が入場しなかった」ことを対比する二者対比型に解せられる。

3.3. 限量的要素の生み出す曖昧性について

3.3.1 限量的表現の分類

ここでは3.1.で $A^{+-}(\alpha)$ 類とした要素を意味的性質により分類する。

限量的な名詞句には「ナイ」否定文において否定の作用を受けやすいものとそうでないものがある。(この点はKato(1985)が指摘している。)例えば、

(17)まだ全部(は)読んでいない。

では、「全部読んだわけではない」つまり、 $\neg V$ という読みが存在する(「は」のない場合は $V\neg$ の読みも存在する。)つまり「全部」は否定の作用を受けやすい。ところが、

(18)まだ誰か{が/?は}来ていない。

は、「来ていない人がある」の意味にはとれるが「誰かが来ているわけではない」=「誰も来ていない」という意味には通常とれない。つまり、「誰か」は否定の作用を受けにくい。また、

(19)??ジュースを少し(は)飲まなかった。

(20)会員が殆ど来なかった。

も、それぞれ「少し」、「殆ど」が否定の作用を受ける解釈が得にくい。

より一般的に「ナイ」による否定の作用を受けやすいかどうかについて数量詞類を分類すると次のようになる。(Kato(p114)の分類とかなり重なる。)なお、数量詞については「QのN」(全部の本)、「Q」(全部)、「NP - - - Q」(本を全部)、「NのQ」(会員の多く)等の用法全てを含めて考える。

α 否定の作用を受けやすいもの

全部、みんな、全員、両方、多く、沢山、大勢、誰も(+格助詞)

β 否定の作用を受けにくいもの

殆ど、各々の、大部分、かなり、たいてい、殆ど、少し、少数、誰か、どれか、個数表現(一人、等)

また、時や頻度に関する限量的な副詞句や程度の副詞句についても同様の分類ができる。

α 否定の作用を受けやすいもの

いつも、つねに、毎日、毎回、しょっちゅう

β 否定の作用を受けにくいもの

ほとんど、ほぼ、かなり、たいてい、たいがい、ときどき、ちょいちょい、たまに

(22)彼は毎日来ない。(二義的)

(23)彼はときどき来ない。(一義的)

3.3.2 有標的環境

ところが、前節で否定の作用を受けにくいとした限量表現等が、現に否定の作用を受けるように解釈される場合がある。例えば、

(24) 誰かがその仕事をやらないと皆が困る。(=誰もやらないと困る)

(25) 誰かが裏切らない限りこの計画は成功する。

(26) 少しは食べないと体を壊すよ。(=少しも食べないと体をこわす)

(27) 時々は来ないと皆に忘れられる。

(28) 大半の社員がストで遅れない限り仕事はいつもどおりに行く。

(29) 数百人の客が入らない限り営業が成り立たない。

(30) 昨日の空襲で殆ど壊滅しなかった工場は一つもなかった。

(31) ATRでは休日でも誰かが仕事をしていないことはめったにない。

このような環境を有標的環境と呼び、前節で取り上げたような通常の環境を無標的環境と呼ぶ。

また、工藤(1988)が指摘しているように、3.1.でA⁺類とした「そろそろ」等の副詞類は無標的環境で否定と共起しにくい(32)が(33),(34)のような無標的環境では否定の作用を受ける。

(32) ??そろそろ身の振りかたを考えない。

(33) そろそろ身の振りかたを考えないと後で困る。

(34) そろそろ身の振りかたを考えていない人は殆どいない。

「誰か」等が無標的環境で否定の作用を受けにくいのは、「誰も」という形式によって曖昧性なく同じ内容を表しうるからであろう。「殆ど」は、「全部に近い量」、「そろそろ」は「今から余り遅れることなく」というように、もともとその表す量、時間の範囲が単純でないため、その逆領域(「殆どでない」量、「そろそろでない」時間)が把握しにくいいため無標的環境で否定の作用を受けにくいのではないかと思われる。

ではこれらの表現がなぜ有標的環境で否定の作用を受けるのかというと、例えば(24)では、「誰かが仕事をする」ことが無標的な事態と捉えられそれが取り消される有標的な事態について述べている。(25)では「この計画が失敗する場合」がここで問題とされる事態として一旦着目され、「そのためには誰かが裏切る必要がある」との把握が成立した上でその取り消しについて述べている。

このように、pということが一旦心理学的な「地(ground)」として把握された上でそれを取り消す形である事柄を述べる場合に「p ない」に対して有標的環境が成立する。実は条件節や二重否定の場合に限らず、

(6) (いつもは誰かが手助けしてくれるのだが)?肝心の時に誰かが助けにきてくれなかった。

のように、予め無標的なこととして捉えられている p への期待が裏切られるような場合にも有標的環境が生ずる。

なお、「少しは」のように最小限型の対照のハを伴うものが否定の作用域内に入るのは他の場合より条件が制約されている。例えば(7)のようには言えるが(8)のようには言えない。

(7) 少しは食べなければ体をこわす。(=少しも食べなければ体をこわす。)

(8) *少しは食べなければすぐやせられる。(=少しも食べなければすぐやせられる。)

つまり、好ましくない事態を惹起する条件を述べる部分に限られるように思われる。

4. 対話文翻訳への応用

本節では本研究の対話文翻訳への応用可能性について述べる。まず簡単に英語の否定文の性質を示したのち、日本語・英語間の翻訳に際しての否定要素の処理について述べる。

4.1. 英語の否定文について

まず、英語の否定文の特徴をいくつか挙げる。第一に日本語にない要素として次の二つがある。

(i) nobody, nothing, no one, never 等のように、形態的に否定を融合した形式

(1) He saw nothing of interest in it.

(=) He didn't see anything of interest in it.

(2) He has never been on time to a meeting.

(=) He hasn't ever been on time to a meeting.

(3) No one read the book.

(=) The book was not read by anyone.

(ii) rarely, scarcely, hardly, few, only 等、意味上否定を内在する形式

(i)と(ii)を併せて否定的語句と呼ぶことにする。これらは、否定辞notと同様にanyのような否定対極要素をトリガーしうるし、副詞類の場合文頭位置に起こって否定倒置¹⁾を引き起こす。

(4) Hardly anyone believe him.

(5) Never had I seen such a marvelous device.

第二に否定の作用域についていうと、大ざっぱに言って、英語では表層で否定的語句の右側にある要素は否定の作用域に入りうるが左側の要素は入り得ない²⁾と言える。³⁾

例えば、

(6) John didn't attend the party because he wanted to see Mary. (2義)

(7) Because he wanted to see Mary, John didn't attend the party. (1義)

これはSVO語順を反映したものと思われ語順が曖昧性解消の決め手にならない日本語とは異なる。anyのような否定対極要素は否定の作用域内に起こらねばならないから、anyが表層で否定的語句の左側にある場合は非文になる。

(8) *Anybody didn't leave.

(9) Nobody left.

(10) I didn't show anyone anything.

(11) I showed no one anything.

(12) * I showed anyone nothing.

第三に否定の焦点についていうと、英語の否定文では日本語のナイ否定では否定の焦点になりえないような要素を焦点にすることができる。例えば、

(13) ??太郎は1956年に生まれなかった。(1958年だ。)

(14) Tarou wasn't born in 1956.

(15) ??太郎が来なかった。(次郎だ。)

(16) Tarou didn't come.

ただし、この場合通常焦点要素に強勢がおかれ文が下降 - 上昇型イントネーションをとる。

4.2 翻訳上の問題点

最後に日本語英語間の対話文翻訳において問題となる点を挙げる。

1. 日本語の「ナイ」文で曖昧性要素が「は」を伴っている時
この場合は曖昧性要素が現に否定の作用域に入っていることを疑いなく決定できる⁴⁾。従って英語では表層で否定的語句より右側に生成しなければならない。

2. 英語で曖昧性要素が否定的語句の左側にある場合
この場合は英語では曖昧性要素が否定の作用域の外にあると決定できる。⁵⁾ 対応する日本語では完全に曖昧性を消した文が得られないが、その要素には「は」をつけず出来るだけ表層で左側に生成するべきであろう。
(一般に左側の要素ほど高い作用域を持ちやすいから)

3. 英語で否定的語句の右側にある曖昧性要素が否定の作用域内に理解されるか否かを決定するのは音調等の情報を用いない限り一般にはむづかしいと思われる。日本語の場合も「は」を伴わない曖昧性要素が否定の作用域内にあると理解されるか否かは一般には決定しにくい。(但しヒューリスティクスによってある程度、選ばれやすそうな理解を求められる場合もある。⁶⁾) 従って実際上は、曖昧性を含んだ文を同様に曖昧性を含んだ文に翻訳するしかないと思われるが、将来の課題として、曖昧性を有する文を、相手方言語で同様の曖昧性と優先解釈を持つ文へ翻訳するという方向が考えられる。⁷⁾

4. 誰も、何も、どの - - も、余り、さほど、さして、たいして、決して、ちっとも、めったに、 - - しか、等否定的環境にしか起こらない要素には、

何も - - ない (A) not --- anything
(B) nothing

のように二通りの対応が考えられるもの(誰も、何も、決して、等)と

めったに - - ない (B) seldom

のような一通りの対応しかないもの(めったに、 - - しか、等)

の二つがあるが、前者の(A)の場合は表層での左右関係が入れ替わらないように生成しなければならない。

5. 殆ど、等否定的環境以外にも出る要素だが否定的環境にある場合⁸⁾は英語では否定を吸収したhardly等に対応付けなければならないものが存在する。

上記のような点を捉えるために、翻訳時の中間表現において最低限保持しなければならない情報は(i)否定に呼応する要素(上の4, 5に上げた要素)の存在とそれがどのレベルの否定と呼応しているのか(あるいはしていないか) (ii)否定的語句と、曖昧性要素の間の可能な作用域の広狭関係(日本語では「は」の存在/不存在等に、英語では表層語順等に対応する)であると思われる。さらに、not --- anythingのような不連続な要素と、nothingのような単一要素の間の同義性が捉えられねばならないと思われる。但し、具体的な中間表現の形などは、副詞類や名詞句構造一般の扱いその他文法全体の方針と切り離して決め難い問題であるので別の場で示すこととしたい。

- 1) 否定疑問文の類型については田野村(1988)に述べられてある。
- 2) 実際はこのように固定した表現としての性格の強いものから、「行ってくれないと / 行ってもらっては 困る」のようなもの（一般的に言って、「VP + (否定) + 条件表現 + 悪い評価を表すもの」の形で間接的に義務 / 禁止を含意するもの）まで連続的である。

1 章の注

- 1) Horn(1989)がmetalinguistic negatorと呼ぶものに当たる。
- 2) 通常の否定文は、(持つとすれば)否定の焦点を持つ。ところが、否定文の中には否定の作用を受けない位置(否定のスコップ外)に焦点を有する、すなわち、いわば肯定的焦点を有するものがある。例えば、次の会話を見られたい。
 A: 誰がパーティーに来なかったの?
 B: 太郎が来なかった。
 上のB文では「誰かが来なかった」ことが前提され、それが太郎であることが断定されている。すなわち「太郎」が焦点になっている。この種の否定文は、一般の否定文とはやや性質を異にするので、以下特に断わらない限り考察対象外とする。
- 3) P' [p / q] を成り立たせるような q の存在そのものが含意されるわけではない。なぜならば次のように言える。

少なくとも太郎が来たのではない。もしかすると誰も来なかったのかも知れない。

少なくとも全部は食べなかった。もしかすると全然食べなかったかも知れない。

- 4) その一例として、否定のスコップに関する久野(1982)の議論を以下にやや詳しく検討する。

久野は、次の三つの文の許用度の相違を取り上げ、説明を試みている。

- (a) ??私は1920年に生まれなかった。
- (b) 私は1920年には生まれていない。
- (c) 私は1920年に生まれたのではない。

久野は、これらの文の許用度の相違は、否定のスコップの問題として以下のように説明する。

- (d) 否定辞のスコップ: 否定辞「ない」のスコップは、それが附加されている動詞、形容詞、「名詞・形容動詞+だ」に限られる。(久野(1982)。127)

(d)によると、(a)では、否定のスコップは「生まれる」にしか及ばない。従って、例えば「1920年に、私は、生まれるのをやめた」というような、現実には有り得ない解釈が強いられ、不適格となる。一方(b)

は、「1920年に、生まれていたか否か」に対する答えとして、適切に用いる。

一方、「Xのではない」なる文では、X全体が否定のスコープに入るといふ。これによって、(c)は、「1920年に生まれた」全体が否定のスコープに入ることになり、その適格性が説明される。ところが、久野自身の認めるように、次のような文は(25)の一般化の例外となる。

(1982.128)

(e) 太郎は、この週末、余り一生懸命勉強しなかった。

(f) 今日は車で来なかったので歩いて帰らなければならない。

(g) 今日は花子と一緒に来なかった。

上の文では、下線部が否定の焦点であり、従って下線部が否定のスコープに含まれることになる。これは(d)の一般化に反することになる。

そこで久野は、(d)に対して次の但書をつけている。

(h) (否定辞「ナイ」のスコープが)((25)のような)制限を超えるのは、否定の焦点が「マルチプル・チョイス式インフォーメーション構造」を持っている場合のみである。(1982.130)

久野によると、例えば(f)に対応する肯定文「僕は今日車で来た」(下線部が焦点)は、(i)のような「マルチプル・チョイス式」情報構造を持つのに対し、(a)に対応する肯定文は、(j)のような「マルチプル・チョイス式」情報構造を持つと考えることは困難で、(k)のような「穴埋め式」情報構造を持つと考えられる。

(i) 僕は、今日、◎車で 来た

☐ バスで

☐ 車で

☐ 歩いて

(j) 僕は ◎1920年 に生まれた。

☐ 1930年

☐ 終戦の年

☐ 1940年

(k) 僕は 1920年に 生まれた。

このような情報構造の相違のため、(f)の「車で」は、(i)により否定のスコープに入る一方、(a)の「1920年に」は、否定のスコープに入らず、上述の許用度の相違が生ずるのであるという。以上が久野の説の概要である。

しかし久野のこの説明には重大な難点がある。それは、否定のスコープという概念が混乱していることである。「(マルチプル・チョイス形の場合を除き)否定辞『ない』のスコープは、それが附加されている動詞、形容詞、『名詞・形容動詞+だ』に限られる」と久野は述べるのである

が、そもそもどのような意味で、「ない」が附加された動詞等が否定のスコープに入ると言っているのであろうか。例えば、

(1) 私はタイ語がわからない。

のような文は、普通「『わかる』ではなく他のX(例えば『聞こえる』)である」というようなことを意味しない。つまり、「わかる」は例えば(i)の「車で」が焦点であるというのと同じ意味で否定の焦点にならない(だからこの場合はそもそも否定の焦点がないという議論も成り立つ。実際海野(1985)は「私は今朝朝ごはんを食べていない」のような文は否定の焦点を持たないとしている)。勿論(1)では「わかるかわからないか」が問題になっているのだから「わかる」が焦点だという立場をとることもできるが、その論理でいくと、(1)は、「(私が)タイ語がわかる」か「(私が)タイ語がわからない」かが問題になっているのだから、文全体が焦点になっているという議論も同様に成り立つことになる。従ってデフォルトの場合動詞などにが焦点になるという久野の主張には(従って『ない』のスコープはマルチプル・チョイス形の場合を除き動詞等に限られるという分析には)余り根拠がないように思われる。

更に問題なのは久野の分析ではナイによる否定の場合には焦点とスコープとが事実上一対一対応になってしまうことである。つまり、マルチプル・チョイス式焦点がない場合はスコープは動詞などにとどまりマルチプル・チョイス式焦点のある場合はその要素まで広がるという意味で。このような立場にたと、例えば、

(m) 私は昨日この仕事を山田にやらせなかった。

のような文では例えば「今日ではなく昨日」、「あの仕事ではなくこの仕事を」、「佐藤にではなく山田に」等の(「マルチプル・チョイス式」焦点の)理解のほか、単にやらせたかどうかを問題にするという理解も可能であるから、(m)の文は何通りもの否定のスコープを持ち得ることになる。(その一方で久野が「Xノデハナイ」ではXが否定のスコープだと述べているのは混乱している。「昨日この仕事を山田にやらせたのではない」ではやはり「昨日」、「この仕事を」、「山田に」、文全体、等が焦点になりうるからである。)

スコープの相違は「読み(reading)」の相違を示すという通常の理解に従うと久野の説明では(m)は何通りにも曖昧(ambiguous)であることになる。このように数多くの曖昧性を認めることは余り望ましいことではないし(Kempson(1976))、(m)が、例えば(n)や(o)が二通りに曖昧なのと同じ意味で何通りにも曖昧だと言えるのかどうか疑わしい。

(n) いつものように昼食を食べなかった。

(o) 切手を貼って投函しなかった。

本稿では、(o)や(n)は意味的に曖昧であると考え、(m)は意味的には一義であって語用論的な理解の可能性に選択の余地があるものとする。

なお、久野はガでマークされた主語は決して否定のスコープに入らない(1982:133-4)し主題も(対照性の有無に拘らず)否定のスコープに入らない(134-6)としているのであるが、

(p) あの交渉には本人が行かなかった。だからまともらなかった。
のような文では「本人ではなく他の人が入った」つまり「本人が」が否定の焦点になる理解が可能だし、

(q) 他の人たちはみんな来たがさすがに太郎は来なかった。
のような文でも「太郎(も)が来た」ことが予想されそれが否定されているのだから「太郎」は否定のスコープに入っているという考えも十分成り立つ。つまり適切な発話文脈が与えられれば、主語や主題でさえ否定の焦点になりうるように思われる。

このようなことから本稿では、「ない」の否定のスコープは決して久野の言うように狭くはないと考える(3章参照)。久野の指摘は意味的な否定のスコープ内にある要素が実際に否定の焦点として理解されるための語用論的制約として捉えられる。

2章の注

1) 「最近太郎を見かけない」、「今日は朝ごはんを食べていない」のような例。1章の注4参照。

2)

(i) 誰でも知っているように太陽が地球の回りを回っているのではない。

(ii) 誰もそんなことは思うまいが私が彼女を殺したのではない。

のように、誰も信じていない事柄pをノデハナイで打ち消す表現はあるが、少なくとも議論上pを信ずる人があることを想定した言い方である。

3) そのiが何であるか話者が知っている必要は必ずしもない。例えば、(少なくとも)太郎が来たのではない。誰が来たのか知らないが。のように言える。

3章の注

1) ここでの分類は岩倉(1974)、Kato(1985)、海野(1985)、田窪(1987)などのものと部分的に重なる。

2) (a)類要素が自然に否定の焦点になるのは、文脈的に何かと対比されている等特に有意味な要素である時、埋め込み文の中にある時等比較的限られている。中でも主語は最も否定の焦点になりにくい。これら要素、特に主語は総記的に解釈されやすいことがその一因と思われる。ただし久野が、数量詞を伴わない主語は決して否定の焦点にならないとしている(1982:135)のは強すぎると思われる。

固有名詞等定(definite)対象を指示する名詞句の場合は否定の作用を受けているか否か直感的に明らかでない場合があるが、裸名詞句(bare nominals)が、(総称(generic)的、定的でなく)不定(indefinite)的(あ

るいは、存在的)に用いられている場合は直感的にも常に否定の作用を受けているように感じられる。例えば、

パーティーに女性が来なかった。

は、「来なかった女性があった(ヨ→)」意味にはならず、「一人も女性が来なかった(→ヨ)」意味になる。

入院中本を読まなかった

この仕事は学生にやらせたくない。

でも同様である。

(α)類要素が主題になっている場合も直感的に否定の作用を受けているか否か決しがたい場合がある(対比性の有無にも関連する。)。論理的には否定の作用を受ける要素なのだが、既に導入された、それについて語られる要素であるという語用論的性格上否定の作用を受けているように感じられにくい場合があるものと一応考えておく。

3) これらでは、否定の作用外に解釈される場合と作用内に解釈される場合で共起する動詞句の範囲が異なり後者では継続性の動詞句に限る。

3月まで結婚しなかった。(否定の作用外)

3月までそこにいなかった。(否定の作用外または作用内)

4) 「あまり」等が現れる環境は否定文よりはやや広い。例えば、

あまり飲むと体にわるい。

?さはどうまくは書きにくい。

あいつはあまり酒を飲みすぎる。

5) これらが現れる環境は否定文よりはやや広い。例えば、

びた一文やったら後で後悔する。

この種の環境は3.3で述べる有標的環境である。

6) 「誰も」は格助詞を伴わない場合のみ否定対極表現になる。

7) 但し

決して来ると思わない。

のようにこれらの副詞類と「ない」が同一文中になくより「深い」位置にあることがある。この問題はKato(1985)が扱っている。

8) 但し、次の例のように相手の発言の適切性を打ち消すような特殊な場合は否定の作用を受けうる。(Horn(1989)のいうmetalinguistic negationにあたる。)

「田久保先生によると正しい」のではない。誰がみても正しい。

9) 否定文で尺度表現に「は」が付せられた時、「上限否定型」と次の「二者対比型」のいずれにも用いられうる。

寒くはない。暖かい。(上限否定型)

寒くはない。だが気分が悪い。(二者対比型)

McGloin(1988,note8)に同旨の指摘がある。

10) なお、沼田(1986)が指摘するように、表層上ハが付いている要素と、意味上対照される要素の範囲が同じでない場合がある。例えば、

雨は降っていない。

では、ハの範囲は「雨が降る」である、つまり、「雨が降ってはいない」と同義と解するのが最も普通であろう。一方、逆に、

太郎と会うとしても、次郎と会いはしない。

では、「次郎」がハの範囲(「次郎とは会わない」と同義)と解するのが普通であろう。沼田は、それぞれNスコープ、Fスコープと呼んでいる。また、次ののように、構成素を成すと言えるかどうか疑わしいようなもの(「全部きれいに」)が意味上対照される場合もある。

全部きれいにはできなかった。

4 章の注

1) 会話文ではあまり用いられない構文であるが。

2) 但し例外として、every, all, many等否定の作用を受けやすい数量詞類は主語すなわちnotの左側にある場合でも否定の作用域に入りうる。従って次の文は二義的である。

Every man in the room didn't sleep through the fight next door.
(Kroch(1978))

3) 特殊な場合として文頭に否定的語句がある場合はS全体が否定の作用域に入る。

Not many of the students came on time.

4) ただし、3 . 2 , で述べた例外がある。

5) ただし注2参照

6) 概略次のような手掛かりが存在する。

1 . 「決して」等より右側の要素は否定の作用を受けやすい。

2 . 「あまり」等の直左の要素は否定の作用を受けにくい。

3 . 否定の作用を受ける要素の右側の要素は否定の作用を受けることが多い。但し、対照のハを伴い要素否定の作用を受ける要素の右側の要素は例外である。

より詳しくは下記を見られたい。

Tadasu Hattori and Kei Yoshimoto(1988)

Disambiguating Japanese Negative Sentences

(Paper Presented at the 63rd LSA Meeting)

(Research Activities of the NLU Department 1988 所収)

7) そのような発想による研究にはvan Munster(1988)の英語・オランダ語間の翻訳に関するものがある。

8) 厳密に言うと否定の作用域外にある場合。

参考文献

- Chomsky, N. 1968 'Deep Structure, Surface Structure, and Semantic Interpretation.' in Studies on Semantics in Generative Grammar.
- Cooper, Robin. 1983 Quantification and Syntactic Theory. Reidel.
- Fauconnier, G. 1975 'Polarity and Scale Principle', CLS 11.
- 1978 'Implication Reversal in a Natural Language', in Formal Semantics and Pragmatics for Natural Languages, 289-301, Reidel.
- Givon, T. 1978 'Negation in Language: Pragmatics, Function and Ontology' in Syntax and Semantics 9.
- 1979 On Understanding grammar, Academic Press.
- Greenbaum, S. 1969 Studies in English Adverbial Usage. Longman.
- Grice, 1967 Logic and Conversation. Unpublished.
- Hobbs, J.R. and Shieber, M. (1987) 'An algorithm for generating quantifier scopings.' Computational Linguistics, Volume 13.
- Horn, L.R. 1976 On the Semantic Properties of Logical Operators in English, IULC.
- 1989 The Natural History of Negation, Univ. of Chicago P.
- Jackendoff, R. 1972 Semantic Interpretation in Generative Grammar.
- Rochenan, . 1988 Focus in Generative Grammar.
- Kempson, R.M. 1979 'Presupposition, Opacity, and Ambiguity.' in Syntax and Semantics Vol.11. Academic Press.
- Jackendoff, R. 1972 Semantic Interpretation in Generative Grammar.
- Kato, Y. 1981 Negation and Focus in Japanese. (Sophia Linguistica 11)
- Kato, Y. 1985 Negative Sentences in Japanese. (Sophia Linguistica 19)
- Kroch, A.S. 1978 The Semantics of Scope in English. MIT. dissertation.
- Kuno, S. 1982 'The Focus of Question and the Focus of the Answer', CLS .
- Kuroda, S.-Y. 1965=1979 Generative Grammatical Studies in the Japanese Language. PhD dissertation, MIT. Reproduced by Garland.
- Lasnik, Howard. 1975 'On the semantics of negation.', Contemporary Research in Philosophical Logic and Linguistic Semantics. (eds.) Hockney, D. et al.
- Lasnik, Howard 1972=1976 Analysis of Negation, PH.D. dissertation, MIT.
- Linberger, M.C. 1981 The Grammar of Negative Polarity. Reproduced by Indiana University Linguistics Club.
- McGloin, Naomi Hanaoka 1976 'Negation.' Syntax and Semantics 5: Academic Press.
- 1988 'The Role of WA in Negation', Perspectives on Topicalization: the Case of Japanese WA. (ed.) J.Hinds. Benjamins.

- Moran, D.B. 1988 'Quantifier scoping in the SRI core language engine.' Paper read at the 26th ACM Meeting
- van Munster, E. 1988 'The Treatment of Scope and Negation in Rosetta.' Proceeding of the 12th International Conference on Computer Linguistics, Budapest.
- Ohye, S. 1981 'The Scope of Question and Negation in Japanese', 文学研究 78
- Smith, S.B. 1974 Meaning and Negation. Mouton.
- Takubo, Y. 1985 'On the Scope of the Question and the Negation in Japanese.', in Papers in Japanese Linguistics. Vol.10.
- 岩倉国浩 1974 日英語の否定の範囲 研究社
- 海野典子 1985 日本語の否定表現の研究 京都大学卒業論文
- 太田朗 1980 否定の意味 大修館
- 尾上圭介 1981 「は」の係助詞性と表現的機能 国語と国文学
- 久野 1983 新日本文法研究 大修館
- 佐川誠義 1976 日本語の否定の範囲 言語研究 70
- 田窪行則 1987 統語情報と文脈情報 日本語学 (6巻5号)
- 田野村忠温 1986 命題指定の「の」の用法と機能 - 諸説の検討 - 言語学研究 5 (京都大学言語学研究会)
- 田野村忠温 1988 否定疑問文小考 国語学
- 茅野直子他 1987 副詞 (外国人のための日本語 例文・問題シリーズ)
- 寺村秀夫 1985 日本語のシンタクスと意味 2 くろしお出版
- 沼田善子 1986 「とりたて詞」 奥津敬一郎 (編) いわゆる日本語助詞の研究 凡人社
- 南不二夫 1974 現代日本語の構造 大修館